

1994.8

第19号

博物館だより

大津市歴史博物館



横山大観「春」・菱田春草「秋」(対幅) 明治34年頃 個人蔵

日本画壇の巨匠

横山大観・菱田春草展を開催

8月3日(水)～9月11日(日)



横山大観「蓬萊山」高島屋史料館蔵

〈主な展示作品〉

- 横山大観「釈迦十六羅漢図」(対幅) 東京国立博物館蔵
 横山大観「山路」 京都国立近代美術館蔵
 横山大観「焚火」(三幅対) 熊本県立美術館蔵
 横山大観「寒山拾得」(六曲一双) 福岡市立美術館蔵
 横山大観「鳩之浦絵巻」 滋賀県立近代美術館蔵
 横山大観「正気方光」 樺原神宮蔵
 菱田春草「白き猫」 春草会蔵
 菱田春草「暮色」 京都国立博物館蔵
 菱田春草「雄快(海岸怒濤)」 長野県信濃美術館蔵
 菱田春草「夕の森」 飯田市美術博物館蔵
 菱田春草「初夏(牧童)」 山種美術館蔵
 菱田春草「雀に鴉」(六曲一双) 東京国立近代美術館蔵



菱田春草「椿と猫」個人蔵

企画展の概要

横山大観(一八六八〜一九五八)は茨城県水戸の生まれ、菱田春草(一八七四〜一九二二)は長野県飯田の生まれですが、ともに岡倉天心(一八六二〜一九一三)が校長をつとめた東京美術学校(現東京芸術大学の前身)に学んで、伝統的な日本画を修めました。そして、東洋画が育ててきた品格を保ちながら西洋画に匹敵する写実力をも持った絵画を理想とした天心の意を、具現しようとするところから出発しました。

それがため二人は、さまざまな困難にぶつかることとなります。しかし、明治三十一年(一八九八)の日本美術院結成に始まり、「朦朧体」という非難を受けたりしながらも、アメリカ・ヨーロッパへの研修や、茨城県五浦移住という苦境を経て、やがて明治四十年に始まった文展においては、色と形の中で遊ぶ自己の境地を見出していきました。早世した春草は、特にこの時期において、大胆な構成感のうちに静かで伸び伸びとした画境を切り開いています。

一方、大観はこの後も日本美術院を再興したり、ローマの日本美術展に参画するなどし、さらに戦後のたい腐を生き抜いて、豊かな色彩と多様な形態の中に東洋的な思想と西洋の写実を生かして、二〇世紀の東洋美術というにふさわしい画境を展開させるにいたったのでした。

本展は、この日本画壇の巨匠、横山大観と菱田春草の名作約一二〇点を集めて、その近代日本画の形成における業績を回顧しようとするものです。

収蔵品紹介 18

船大工道具

竹中弘家所蔵（本館寄託）

鉄道や自動車普及する以前、琵琶湖船運は、荷物を運ぶための重要な交通手段であった。東国や北国からの荷は、湖上を大津へ運ばれ、京・大坂に向かったのである。この運搬船は「丸子船」と呼ばれ、琵琶湖独特の形をしており、百石から二百石積の船が多かったようだが、最大で五百石積近くの丸子船が、江戸時代の湖上に浮かんでいた。運搬船の他にも、漁業に利用される漁船、湖岸の水田を往来するため利用された田船など、大小様々な木造船が浮かんでいた。

琵琶湖の和船には、次のような特徴がある。①船の船先が、板を幾枚か立てて並べ、継ぎ合わして構成された造りで、②板の継目に横縄を込め、③丸子船の場合、オモギと呼ぶ丸太を半切したものを、側板の上端に付けていた。琵琶湖以外の和船と比べてみると、①では一般に、側板をそのまま曲げてゆき船先で左右の板を止める、②は、船板の継目から漏水するのを防ぐための詰め物で、一般に横縄を利用することが多いのに対し、横縄を竹ヤトク（竹べら）で込めるのは琵琶湖の船のみである。これらは、表面的な特徴であり、船の構造全体から見ても琵琶湖の船には、一般の和船と異なった点が見られた。

こうした特徴ある船を建造する船大工が、湖岸の各地で仕事をしていたのである。船



展示中の船大工道具 手前は丸子船模型
(空兵衛造船所蔵)

の構造自身特殊であるから、その技術や道具も琵琶湖にしかないものが多く含まれている。木造船は、基本的に板を船釘で継ぎ合わせて出来上がっているが、この板と板を継ぎ合わせるには、まず板の継目を固定し、ツバノミというもので船釘を入れるための穴を開け、そこに船釘を打ち込み、木を埋めて穴をふさぐ。和船建造の基本となるこの船釘とツバノミは、近くの鍛冶屋でこしらえられていた。船板の厚さのためか、琵琶湖の船釘は、幅が細く厚みがあり、ツバノミもそれに合わせたサイズとなっており、他所のツバノミのように木製の握りが付かないのも特徴で、琵琶湖の船大工独特の道具といえる。以上は、琵琶湖の船大工の技術と道具の一端を示したにすぎない。

本展示資料は、尾花川で長年船大工を営んでいた竹中弘家所蔵の道具類である。竹中家は「船元」の屋号をもち、この道具が利用されていた頃は、琵琶湖疏水の三十石船などを多数建造していた。



ツバノミと船釘

琵琶湖において大津（尾花川も含まれる）と堅田の船大工は、特別に保護されていた。天正十二年（一五八四）、豊臣秀吉より「江州船大工四拾人中」宛てに出された諸役免除の朱印状にある、四拾人は、堅田と大津の船大工を指していると考えられ、湖岸の船大工の惣代として主導的な位置を保持してきた。彦根藩領を除く、湖岸の船大工は、大津や堅田で修業したのち独立した者がほとんどであり、こうしたことから、大津・堅田は琵琶湖の船の技術的なセンターだったのである。

（和田光生）

「西教寺と天台真盛宗の秘宝」展終わる

平成六年四月二十三日(土)から六月五日(日)までの六週間にわたり開催いたしました特別展「西教寺と天台真盛宗の秘宝」展は、おかげさまで好評のうちに無事終了いたしました。御視覧いただいた方々の数は二〇、一八〇人へのほりましました。

今回の展覧会は、大津市・坂本に所在する西教寺を総本山とする天台真盛宗の宗祖真盛上人の遠忌五百回を記念して、西教寺とその末寺の所蔵する仏教美術のなかから、えりすぐった名品九十二件を展示しました。第一のコーナーでは真盛の生涯とその思想に関する品々を、第二のコーナーには仏像、第三のコーナーには仏画・経典・仏具などの



優品を集めました。これまで未紹介の作品も多かったのですが、一方では重要文化財指定の作品も二十六件にのぼり、また西教寺客殿の本尊薬師如来像などのふだんは目にすることのできない秘仏も多数あり、仏教美術のファンの皆様に喜んでいただけました。なお、会期中の講演会にも、多くの方々の参加をいただきました。

博物館日記抄

平成6年4月1日
平成6年6月29日

- 4月1日 館内会議開く。新たに牧野彩子・西千栄子両氏受付・展示案内職員に
- 6日 韓国亀尾市三〇人來館
- 8日 吉田秀則氏(県立安土城考古博物館)、花園大学一七六人來館
- 9日 親子歴史講座(小関越を歩く)
- 16日 第85回土曜講座「古文書入門」(講師 中森洋学芸員)
- 22日 特別展「西教寺と天台真盛宗の秘宝」展開場式およびレセプションを開く(一五六人)
- 23日 特別展一般公開、山梨県立韮崎高校一二三人、大阪朝日旅行会八八八人來館
- 24日 京都橋女子大学一二五人、武生市ロータリークラブ一行來館
- 26日 開館以来観覧者数三十五万人を達成。上砂安子さんに山田豊三郎大津市長から記念品・花束贈呈
- 28日 中部圏知事会議一行・土木学会一行來館
- 5月2日 山本信吉奈良国立博物館長・神山登大阪市立博物館長來館
- 3日 天台真盛宗滋賀教区末寺一八団体來館
- 4日 天台真盛宗福井教区末寺一四団体來館
- 5日 天台真盛宗伊賀教区・同直轄教区末寺一九団体來館
- 6日 天台真盛宗伊勢教区一一〇団体四、一三八人來館(一日の観覧者数の新記録)
- 8日 西教寺展一部展示替え、紺野俊文氏(慶応義塾大学)來館
- 10日 田辺昭三氏(京都造形大学)來館
- 12日 「琵琶湖と地球の環境を考える会」一行、江差市教育委員会來館
- 14日 親子歴史講座「行ってみようよ石山寺」
- 18日 西川幸治氏(県立大学解設準備室顧問)來館

21日 第86回土曜講座「庭園のみかた」(講師 大阪修成建設専門学校 飛田範夫氏)

22日 NHK放送大学番組製作撮影、金子務氏(大阪市立大学)・宮崎健司(大谷大学)來館

25日 三重県上野市史編さん委員一行、東京立教中学・湖東町高齢者学級(八六八)來館

28日 第87回土曜講座「古建築のみかた」(講師 県教育委員会村田信夫氏)

29日 西教寺寺庭婦人研修会、ふくい仏教美術の会一行來館

6月4日 第88回土曜講座「近世絵画のみかた」(講師 横谷賢一郎学芸員)

5日 「西教寺と天台真盛宗の秘宝」展閉幕、観覧者二万一八〇人を数える。小栗柄健治氏(兵庫県立歴史博物館)來館

8日 田中嗣人・馬場まみの両氏(華頂女子短期大学)、中野俊一氏(河出書房新社)、西川政善氏(小松島市長)來館

10日 山路興造氏(京都市歴史資料館)・西口光博氏(京都市企画調整局)來館

11日 親子歴史講座「立体切り紙をつくらう」

18日 ふるさと大津歴史教室「膳所焼と記念寺」、近畿高等学校教頭会一行來館

23日 森谷尅久氏(武庫川女子大学)・河田有子氏(朝日新聞社)・中野順夫氏(カメラマシ)來館

29日 第10回歴史博物館協議会開催

博物館だより 第19号
発行日 平成六年八月二日
編集 大津市歴史博物館
発行所 大津市御陵町二二二
大津市歴史博物館
電話(〇七七五)二二二二〇〇代